

中堅・中小企業でいまだ残るオフコンの基幹システム。 パッケージ化しにくい独自業務を無理なく継続・拡張するための解決策・ NetCOBOL×Action ZenによるWindowsマイグレーション。

株式会社 **内田洋行ITソリューションズ**

株式会社内田洋行ITソリューションズ

東証1部上場の商社・(株)内田洋行グループで情報システム事業の中核を担うシステムインテグレーター。

国内21拠点で公共、民間問わず、多岐にわたる分野でITサービスを提供。基幹業務パッケージソフト「スーパーカクテル」シリーズのほか、建設業向け「PROCES.S」、マンション管理業向け「MANSION21」など各種ソリューションの提案・販売を行う。

本社: 東京都港区新橋6-1-11

Daiwa御成門ビル

<https://www.uchida-it.co.jp/>



「オープン化」「マイグレーション」というワードでシステムの刷新が語られるようになって久しいが、依然としてオフコンによるレガシーなシステムが稼働している現場も少なくない。国産メーカーがオフコンの販売終了に舵を切り、数年後にはサポートも終了する中、ユーザー企業はいよいよ「オフコン後」のシステムを検討せざるを得ない状況となった。

中堅SIer・内田洋行ITソリューションズでは、選択肢の1つとして富士通NetCOBOLとAction Zenによるマイグレーションを提案している。

オフコンによる基幹システム

かつて企業の情報システムは、ほとんどが大手メーカーが独自に開発したマシンとOS(メインフレームまたは汎用機、オフコンなどと呼ばれる)およびCOBOL言語によって作られていた。時代が進み、Windowsの登場によりオープン化の波が訪れ、企業の情報システムは特定のメーカーに依存しないさまざまな選択肢の中から最適なシステムを構築できるようになったが、ビジネスの根幹を担う基幹システムにおいては未だオフコンのシステムが残っているという。

ITシステムに多額の投資をできる大手企業ならともかく、中堅・中小企業では効率・効果の分りにくいシステムの作り替えにはなかなか踏み切れないという費用対効果の観点や、業務の独自性から適合するパッケージソフトも存在しないという業務性質の都合など、企業によってさまざまな事情からハードリブレースで対応してきたというのが実情だ。

富士通はオフコン機種「PRIMERGY6000」の販売を2018年3月に終了(保守サポートはその5年後の2023年3月終了)し、オフコンユーザーへは「Fujitsu Cloud Service for オフコン」への移行を案内している。これは富士通製オフコン用OS「ASP」で提供されるため過去の資産をそのまま使用でき、かつ時代の潮流にも乗った解決策とも言えるが、富士通の製品・サービスを多く扱ってきたシステムインテグレーター・内田洋行ITソリューションズの渡邊 裕之氏(地域事業本部 関東支店 営業部 営業1課 課長)はもう1つの解決策として「NetCOBOL」を挙げる。

「クラウドは以前に比べてかなり浸透してきた印象はあるが、利用システムで見ると情報系のシステムが多く、いわゆる基幹系のシステムではまだ抵抗感のあるお客様が多いのではないかと。そうしたお客様に対し、オンプレミス移行という選択肢も用意すべきだろう。」(渡邊氏)

NetCOBOLマイグレーション

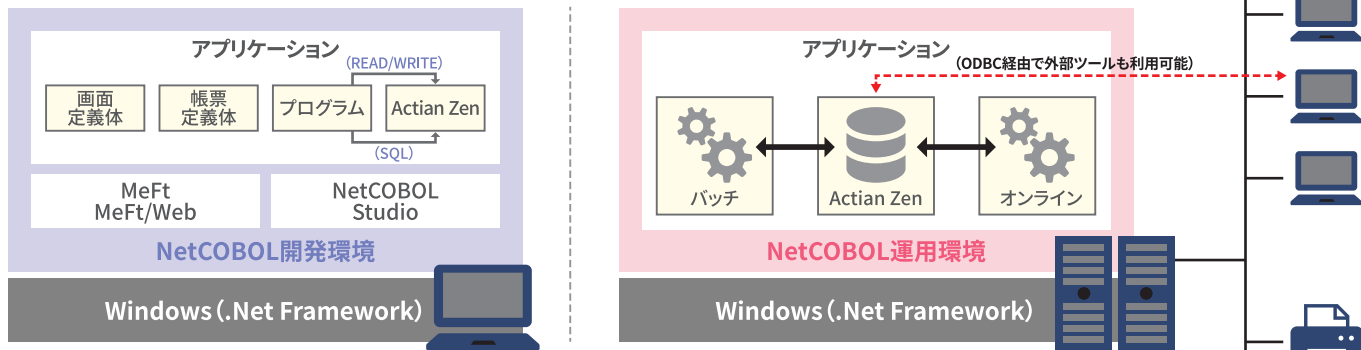
日本企業はセキュリティに対する意識が高く、外部環境との接続に対して慎重であることが多い。製造現場では、インターネットから遮断させているシステムも少なくない。その意味でこれまでオフコンのシステムを使用してきたユーザーの次なる選択肢がクラウド一択しかないというのは確かに無理がある。

「当支店だけでもNetCOBOLによるマイグレーション事例は数十社にのぼる。お客様の多くは地場の中堅・中小企業で、うまく回っている業務を変えたくないし、変える必要もないという意識が強い。」(渡邊氏)

オフコン自体は生産終了なので移行せざるを得ない。しかし、パッケージソフトでは自社の業務を賄えないし、業務に合わせるためには多額のカスタマイズ費用や、場合によっては業務フローの変更を余儀なくされる。オフコンのシステムはその企業が長い年月をかけて最適化した業務フローであることが多く、それ自身が企業の競争力とも言えるため、そのようなことはできるだけ避けたい。それならプラットフォームだけの変更にとどめた方がコストもリスクも低くおさまる、ということのようだ。

「地方の企業はシステムに多くのコストや労力をかけられない。初期投資はもちろん、その後の運用も含めコストや余計な手間を抑えながら、オープン化の恩恵も受けられるのがベスト。Windowsプラットフォームに移行することで、世の中に存在する便利なツールやWebなどの環境も使えるようになる。『NetCOBOL化』が現実的な解決策となる企業は一定程度存在する。」(渡邊氏)

■ NetCOBOL開発・運用環境イメージ



※ Actian ZenはCOBOLのREAD/WRITEはもちろん、ODBCでのSQLアクセスも可能なので外部のツールやExcelからのデータ操作も可能。
 ※ NetCOBOLは開発環境と運用環境で別個のライセンスとなります。詳しくは販売店にお問い合わせ下さい。



株式会社内田洋行ITソリューションズ
 地域事業本部 関東支店 営業部
 営業 1 課 課長 渡邊 裕之氏

NetCOBOL × Actian Zen

同社の「NetCOBOL化」のキーポイントの1つがデータベース「Actian Zen」である。Actian Zenは1982年にリリースされた「Btrieve」を起源とするISAMライクなレコードマネジメントシステムで、40年の歴史の中で基本的なアーキテクチャを変えずに高い安定性を保ち、現在も多くのシーンで活用されているデータベース製品である。

富士通製オフコンシリーズにはRDB/6000(後のSymfoware6000)というデータベース機能が搭載されていたが、このデータベースにはCOBOL言語のREAD/WRITE文でアクセスすることができた。NetCOBOLでは富士通製データベース・Symfowareのほか、Oracle、SQL Serverなども使用できるが、これらは基本的にODBC接続かプリコンパイラを使ったSQLアクセスを前提としている。既存資産で使われているREAD/WRITE文でアクセスするには別途コネクタを導入する必要がある。(OracleおよびSQL Serverのみ。Symfowareは非対応。)

これに対し、Actian ZenはNetCOBOL自体がActian ZenのBtrieve API変換インターフェースを持っているため、上記のようなコネクタを介さず、直接READ/WRITE文でアクセスできる。もちろんODBCによるSQLアクセスにも対応しているので、ODBC対応のサードパーティー製のツールから直接データベースにアクセスして、データを抽出・加工したり、Excelに連携したりといったことも可能である。

「当社でNetCOBOL化を提案する場合、データベースはActian Zenで提案する。READ/WRITE文によるアクセスをそのまま再利用できるのは大きい。機能的にも他のメジャー製品に引けを取らず、価格も手ごろで『NetCOBOL化』と相性が良い。」(渡邊氏)

導入について

前述のようにオフコンのリプレースにはいくつかの選択肢がある。ユーザー企業から相談を受けたとき、同社としても必ずしもNetCOBOL化ありきで考えるわけではない。その企業の事業やシステムの状況・考え方、要件とその優先度、予算感などを丹念にヒアリングし、さまざまな可能性を検討する。

NetCOBOL化の場合は、基本的に富士通製オフコンのシステムであることが前提となる。その上で、「ソースコードが存在しているか?」「使っていない(捨てられる)プログラムはないか?」「日次バッチのリアルタイム処理化といった改善ポイントはないか?」など、効率・効果面も考慮しながら、作業ボリュームを算出する。

また、仮想化などのソリューションも視野に入れる。同社の実績では、VMwareによる仮想化で10台のサーバを2台にダウンサイジングした事例もある。

そうした検討を経て、リプレース後の「To be」を具体化して提案する。NetCOBOL化のほか、自社パッケージ、スクラッチ開発などさまざまな形態のシステムインテグレーションを対応してきた同社だけに、その提案には説得力があるだろう。

「オフコンのマイグレーションにはいろいろ『勘所』がある。当社ではさまざまな対応実績から多くのノウハウが蓄積されていると自負している。メーカーの富士通とも長年のパートナーシップで、フレキシブルに相談できる関係を維持しており、安心してご相談頂きたい。」(渡邊氏)



株式会社エージーテック
 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-21-1
 ヒューリック神田橋ビル 3F
 TEL: 03-3293-5230 sales@agtech.co.jp